

紙 碑

井出策夫先生のご逝去を悼む

澤田 裕之

2016年3月22日、立正大学名誉教授の井出策夫先生が永眠された。享年84歳。

先生と立正地理との絆は長い。先生は東京学芸大学学芸学部（現・教育学部）で地理学を専攻された後、1957年に立正大学大学院文学研究科地理学専攻修士課程に入学され、1975年6月に主査青野壽郎、副査石川与吉・岸本 實両先生のもと、「東京における日用消費財工業の地理学的研究」の論文によって文学博士の学位を取得された。

1968年に立正大学教養部に専任講師として着任された後、1995年には教養部の廃止に伴って文学部地理学科へ、さらに1998年には新設された地球環境科学部地理学科に移籍され、2002年3月に定年退職された。その後も2006年度までの5年間は非常勤講師として地理教育にかかわられた。こうして先生と立正地理との関わりはじつに半世紀近く、専任教員としてだけでも34年の長きにわたるものであった。

先生は専任教員として立正大学の学部および大学院研究科における学生・院生指導に多大な功績を残されたのみならず、教養部所属時代には学部主事や教養部長、さらには学監（副学長）をお務めになるなど、学部と大学の運営にも大きく貢献された。

先生が地理学研究者として活躍された時期のほとんどは、わが国の高度経済成長期に重なっていた。経済の高度成長を牽引した原動力はいうまでもなく工業化であり、当時は地理学界にあっても工業地理学研究が全盛をきわめていた。そうした状況下において先生の研究対象は、京浜工業地帯を主とする大都市とその周辺都市工業の特質・機能・組織・構造、それらの地域類型化など広範にわたったが、とりわけ関心を寄せられたのは日用消費財生産、いわゆる地場産業であった。それは日本経済の高度成長の主柱をなした大企業を支える中小零細製造企業群であり、大都市の地域構造と深くかかわって存在した。先生はそれを「地域の生産集団」としてとらえ、その存在構造の解明に意を注がれた。

その研究は、板倉勝高（信州大学・東北大学）、竹内淳彦（日本工業大学）、北村嘉行（東洋大学）氏らとの共同でなされたものも多く、中には著名な経済学者であった隅谷三喜男教授（東京大学）が加わるものもあって、地理学における地場産業研究の頂点をなしていた。

先生はバリトン調の美声の持ち主であった。講義ではその美声と穏やかな語り口とで学生たちを魅了したにちがいない。先生の教養部時代の同僚教員から、先生は子供のころは少年合唱団に所属しておられたとかで、教員同士の内輪の会では素晴らしい歌声を披露されることもあったと聞いたことがある。またアルコール類、とりわけウィスキーをこよなく好まれ、同僚教員と水割りをやつくりと時間をかけて飲みながら語り合うこともしばしばであったという。

私にとって井出先生は学芸大学学部の5年先輩であった。学部卒業後は期せずして立正大学大学院修士課



程でまたも先輩後輩の関係になった。そのようなことから、私が立正の教員になって以後も公私にわたってお世話とご指導をいただいた。また、井出先生とともに工業地理研究グループを主導した北村嘉行氏と竹内淳彦氏は、学芸大学の学部では同期生と2年先輩、立正大学大学院ではいずれも先輩にあたった。7年前と2年前にあい次いで鬼籍に入られたこのお二人に続いて、今回は井出先生までもが後を追うように旅立たれたことは痛恨のきわみである。

謹んで先生のご冥福を祈ります。